大浪に乘り損ねけり游の子
一抱づつ皆カジメ持ち游の子
俄雨繫げる牛を連れ戻る
長廊下走る蟹あり避暑の宿
灯ともらぬ燈占を見て端居哉

東　總　三句

バスの客ふれあふ汗の肌と肌
日盛や花摘みとりし煙草畑

灯ともさぬ縁の夕餉や夏の月

小湊鐵道沿線　二句

川風に下腹冷ゆる鮎の宿
隧道や滴る音のまへうしろ

手賀沼　三句

手賀沼へ注ぐ流れや早稻の花
醫者らしき人の車や早稻の花
沼縁や二タ年振りの稻の花

大社詣での道（二）

澁谷太郎

京、大阪から大社への道

大社詣では今では一瀉千里といふやうに凡ての旅客は京都からも大阪からも一日に一回出る急行列車を利用して僅かに七八時間で大社驛まで行つて、それか幅十間餘もあるやうに思はれる實に立派なコンクリートで鋪裝された大社參拜道路をバスなり徒歩で兩側に居並ぶ大社詣りの土產ものを賣る賣店や飲食店を見ながら歸へりには土產に何を買ふかと、どこにはいて一寸と食事しやうかと考へつゝホンの一兩日で大社詣でをすまして歸へることが出來るが、昔はなか〳〵左樣に簡單に出來なかつたそうである、大

社詣での道と云へば昔は先づ京都と大阪を起點として行くのが順序のやうであつたそうである、京都からの道は先づ〳〵負坂の峠道を越へて丹波の福知山に出る、今なら京都から汽車で僅か二時間と二十分位で行けるところであるが、徒歩で行けば丹波の山奥を通るのであるから、山姿突如として嶮峻を極める山々の清流の谷間に副ふてゐる道を行くのであるが、大阪からの大社詣での人々も亦昔は大抵この福知山に出るのが順序であつたやうである。尤も大阪からは山陽道を行つて、岡山から津山鳥取と行く大社詣での道もあるが、古老の話では行きは丹波の福知山に出て、歸へりは鳥取から京都と大社を繋ぐ所謂大社詣での道と別れて津山岡山を經て姫路に出て歸へる大社詣での旅人が多かつたそうである。

日本海の蒼波を見て歩む

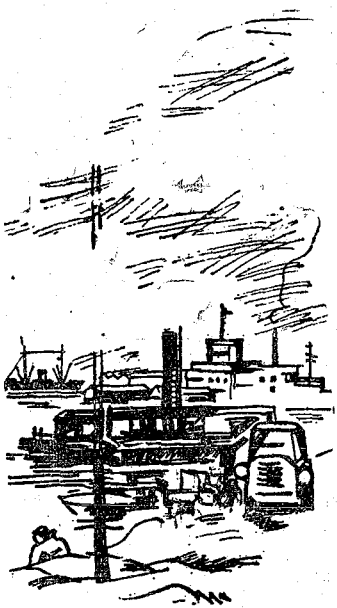
大社詣での道は福知山から大體現今の鐵道線に副ふて但馬の城崎に出て、こゝから香住の海岸に出るやうである、城崎は昔は京都方面から來る大社詣での旅客も亦大阪方面から來る旅客も大抵一泊するところになつて居たそうである、こゝは、元正天皇の養老年間に發見せられたと傳へられてゐる、山陰屈指の溫泉場であるからである。京都や大阪から二日間も費やして漸くこゝに辿りついた旅客は日本海に面する津居山港の後方、内山川の支流大谿川の合流に臨んで東、西、北の三面が桑巒に圍まれてゐる。この溫泉場でゆつくりと一夜の旅の疲れを醫するのである。こゝまでの道は京都からも大阪からも山間のみを通ふてゐるが現在では道幅は大體四五間もあるやうに思はれるが、山砂利を敷いてあるが比較的に凸凹が多いやうである、これから香住の海岸副ひに右に日本海の蒼波に接しながら左には山陰第一の雄大な嶮崖を見て通ふるのであるが、一體城崎から鳥取へかけては海と岩との風光に惠まれて丁度繪のやうな景觀が汽車の車窓からも展開される、昔はこの山陰道を歩んだ旅人には一層その感を深くしたことであらう。

三十二萬石の城下街

鳥取もまた大社詣での道筋にあつて、昔からの山陰道における一都會である。德川時代には外港賀露を控えて殷賑を極めたところで池田氏三十二萬石三百年間の舊城下町である、昔の大社街道は鹿野街道によつて市内に入るのであるが、城崎からこゝまでの道も鋪裝道は唯だの一箇所もない、併乍ら砂利道で割合によく出來てゐる僕は車窓からこの邊の道路を眺めても相當に交通は頻繁であり、所々に道路工夫が凹凸や道路兩側の溝等を修理して居るのを見受けたのであつた。これから大社詣での道は往昔は伯耆辨慶南朝の忠臣であつた、彼の名和長年の所領地であり、また德川幕府時代ではやはり池田氏の城下町として相當に賑はつた米子に

入るのである。夫れから所謂昔の大社道も現今の道も昔から山陰街道の宿場として榮えた、俗謠安來節の本場として聞ゑて來る安來町に道幅七八間位の道路が通ふてゐる。

安來節の元祖は藝者三子

僕は「安來千軒名の出たところ、社日櫻に十神山」と唄はれる十神山を見やうに思ふてこの安來にわざ〳〵下車したが聞くところに依ると安來節は今から百年程前に三子といふ藝者がこの地で歌つた三子節を渡邊千五郎が改作して娘お糸をして完成せしめたものだと聞かされたが、この安來から大社詣での道は鳥取縣の東北部、宍道湖の東岸にある、もと松平氏十八萬石の城下である、松江市に大體米子から安來に至る道幅と略ぼ同樣で走つてゐる、筆者は文豪小泉八雲をして三嘆せしめた風光優雅な水郷の地であるとかねてから聞いて居たので、こゝにも下車して見たが宍道湖水ゝ流れは大橋川となつて市内を東西に分ち、南には中國山脈の連嶺が望まれ、西には風光明媚な宍道湖を控ゑて、全くの觀光都市と思はれたのであつた、市内の主要道路はすべてコンクリートで鋪裝してあつてバスが通ふてゐる、寛永十五年越前宰相秀康の子松平直政が信州松本から轉封されて以來二百三十餘年、その子孫相繼いで治城して明治に及んだだけあつて松江の街ちは何等かキチンとしてゐる。これから大社詣での道は詩僧道光が碧雲湖と呼んだといふ實に風光明媚な宍道湖畔を右に沿ひて大社町に入るのであるが、僕は所々下車して見ただけと古老の人々に昔の大社詣での道筋を聞いたりしただけであるから、專門的には書けないが、現在の道は鳥取や米子、松江の各主要都市には鋪裝改良は大體に於て行屆いてゐるやうだが、大社道といふか山陰道の道路といふか、兎も角道路は未だ鋪裝は出來て居らず、砂利敷道路も全路線とは行かないやうである、これを東海道の幹線道路に比ぶれば前途尙改良すべき餘地が多々あるやうに思はれたのであつた。

（終り）